

“That poor dream, as I once used to call it, has all gone by”

—— 『大いなる遺産』における「夢」について ——

渡 部 智 也*

1. ピップと2つの夢

『大いなる遺産』(*Great Expectations*)はチャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の長編小説第13作目にあたり、ディケンズにしては珍しいコンパクトにまとまった作りも手伝って、彼の最高傑作の1つに数えられる作品である。¹本作の中心に位置するのは、鍛冶屋のガージャリー夫妻に育てられた主人公ピップの、紳士となって愛する女性と結婚するという「夢」であり、彼に財産を譲ることでその夢を叶えてくれるのは何者なのか、という「謎」である。そのような主人公の人となりについて、彼の親友ハーバートは第30章で次のような分析をしてみせる。

“Say, a good fellow, if you want a phrase,” returned Herbert, smiling, and

* 福岡大学人文学部准教授

¹ 例えばジョージ・バーナード・ショー(George Bernard Shaw)は本作をディケンズの「もっとも簡潔にまとまった完璧な本」(“his most compactly perfect book”; v)と評し、アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)は「ディケンズが生み出したもっとも完璧に統一された芸術作品」(“the most completely unified work of art that Dickens ever produced”; 269)と述べるなど、そのコンパクトさと、それに伴う作品の統一性を高く評価している。

clapping his hand on the back of mine, “a good fellow, with impetuosity and hesitation, boldness and diffidence, action and dreaming, curiously mixed in him.” (190、下線は筆者による)

ピップの中には相反する性質がせめぎ合いながら奇妙に混ざっている、という興味深いこの分析の中で、特に注目したいのは「夢見がち」(dreaming)という言葉が使われている点である。この場面の直前、ハーバートに対してピップは自身が抱えるエステラへの熱烈な愛を告白している。そのことを考えれば、彼が紳士となってエステラと結婚するという夢を抱いていることは読者にとってもハーバートにとっても明白であり、それだけにここで夢という言葉が使われているのは至極もっともに思われる。

ところが、ここで読者が見逃しがちな点がある。それは、比喩的な意味のみならず、文字通りの意味でもピップは夢見がちだという点である。「夢」(dream)という言葉には、大きく分けて2つの意味がある。1つは「将来の夢」という表現に端的に現れているような比喩的な意味での夢、もう1つは、眠っているときに見る幻影という、文字通りの夢である。「目覚めているときに見る幻」としての夢と「眠っているときに見る幻」としての夢、と言い換えることも可能だろう。そしてハーバートがピップを「夢見がち」と表現するとき、読者が真っ先に思い浮かべるのは1つめの比喩的な意味での夢であろう。実際、前述したハーバートのセリフも、それを意図して述べたものだと思われる。ところが興味深いことに、ピップは2つめの意味、すなわち夜に眠っているときにも夢見がちで、しかもたびたび悪夢に悩まされる様が描かれているのである。この眠っているときの悪夢に苦しめられるピップの描写にはどのような意味があるのだろうか？本稿ではピップが、自身の将来の夢と関わる形で現れる彼の夜の夢に苦しめられていることを例証した上で、その描写が本作で果たす役割を明らかにしたい。

2. ピップの「悪夢」

ピップにとっての最初の悪夢は、彼が沼地で出会った囚人マグウィッチと関連して描かれている。彼の悪夢のきっかけとなるこの人物こそが、後に謎の恩恵者として彼に財産を与える人物であり、紳士になるという彼の夢を叶えてくれる（叶えそうになる）人物だということを考えれば、彼は最初から自身が目覚めているときに見る夢に関連した夜の夢に悩まされている、と言うこともできるだろう。この囚人に、食べ物とヤスリを持ってくるようにと脅されたピップは家に帰り、義兄ジョーの目を盗んで自分のパンを隠す。そして次の日の早朝にほかの食べ物とヤスリを盗み出すことを決意して眠りにつく。しかし、そういった状況で彼が心地よい眠りを得られない様子が、次のように描かれている。

If I slept at all that night, it was only to imagine myself drifting down the river on a strong spring tide, to the Hulks; a ghostly pirate calling out to me through a speaking-trumpet, as I passed the gibbet-station, that I had better come ashore and be hanged there at once, and not put it off. I was afraid to sleep, even if I had been inclined, for I knew that at the first faint dawn of morning I must rob the pantry. (18)

この少し前、彼はジョーとミセス・ジョーとの会話を通して監獄船 (Hulks) の存在を知り、自分が助けようとしている男がそこから逃げてきた囚人であるという事実を悟っている。従って彼がこの場面で見える「春の強い川の流れてに乗って監獄船まで流される」という夢は、パンを隠し、さらなる盗みを働こうとしている彼自身もまた罪人である、というピップの強い罪の意識と恐怖心が反映されたものだと考えることができる。

ピップの次の悪夢は、この囚人とさらに関連する形で現れる。第10章で酒

場に現れた男は、自分の水割りをこれ見よがしに「ジョーのヤスリ」(“Joe’s file”; 64) (とピップが確信しているモノ) でかき回し、ピップに対し、かつて助けた囚人と自分とが関係していることを印象づける。そしてこの男から1ポンド札を2枚もらったことで、自身の過去の罪の意識が蘇り、再び悪夢となって彼を苦しめるようになるのである。

[M]y sister sealed [the Two One-Pound notes] up in a piece of paper, and put them under some dried rose-leaves in an ornamental teapot on the top of a press in the state parlour. There, they remained, a nightmare to me, many and many a night and day.

I had sadly broken sleep when I got to bed, through thinking of the strange man taking aim at me with his invisible gun, and of the guiltily coarse and common thing it was, to be on secret terms of conspiracy with convicts—a feature in my low career that I had previously forgotten. I was haunted by the file too. A dread possessed me that when I least expected it, the file would reappear. I coaxed myself to sleep by thinking of Miss Havisham’s, next Wednesday; and in my sleep I saw the file coming at me out of a door without seeing who held it, and I screamed myself awake. (65-66)

何日にも渡って「昼も夜も」悪夢となった、という表現からは、この2ポンドの札が夜の夢の中でも彼を苦しめたことが分かる。また、例のヤスリが彼の夢の中に現れた、とも述べており、この一連の出来事が彼にかつての自らの行為を思い出させ、彼の罪の意識と不安感とを反映した悪夢を生み出していることが窺える。

ここまでピップは自らの過去の罪 (と彼が感じている出来事) に関する悪夢

に苦しめられている。この夢は、彼が莫大な財産を得ることになって変容する。ロンドンの弁護士ジャガーズ氏から、自らが莫大な財産を贈与されることになることと知らされた後、ピップは紳士としての教育を受けるためロンドンへ行くことを決意する。しかし第 18 章の終盤、自らの部屋で眠りにつこうとしたピップは、自分のベッドが落ち着かない場所になっていることに気がつき、「もはやその場所がかつての心地よい眠りは得られなくなった」(“I never slept the old sound sleep in it any more”; 114) と述べる。これは、紳士になるという自身の夢が叶う見込みが立ったことで、鍛冶屋の家という現在の環境から心が離れていることを示唆している。そして、「心地よい眠りを得られなくなった」という言葉の通り、出発前夜には次のような悪夢を見る様が描かれる。

All night there were coaches in my broken sleep, going to wrong places instead of to London, and having in the traces, now dogs, now cats, now pigs, now men—never horses. Fantastic failures of journeys occupied me until the day dawned and the birds were singing. Then, I got up and partly dressed, and sat at the window to take a last look out, and in taking it fell asleep.

Biddy was astir so early to get my breakfast, that, although I did not sleep at the window an hour, I smelt the smoke of the kitchen fire when I started up with a terrible idea that it must be late in the afternoon. (124)

彼にとってロンドンに行くことと紳士になることは不可分であり、馬車がロンドンにたどり着かないという夢は、自分は紳士になることはできないのではないかという彼の内にある不安を反映している。また、その馬車を引いているの

が馬以外の動物だという点も見逃せない。² 本作は紳士とは何かという問題が1つのテーマともなっており、それと関連して紳士のステータスシンボルとしての馬車のイメージが描かれている。³ 無論、ここで彼がロンドンへ行くために乗る馬車は、彼の所有物ではない。それでも、これから紳士になるはずの自分を乗せた馬車を引くのが馬ではない、という事実は、自分が単なる「紳士もどき」に過ぎないのではないかという彼の心の奥底にある懸念を映していると言え、ロンドンにたどり着くことができないという夢の内容とともに、彼が密かに持つ自分自身の将来に対する強い不安を表しているのである。

ロンドンで紳士としての教育を受け、紳士として生活を始めるピップだが、そうなるからも彼の未来への不安は消えることがない。そしてその不安感が、引き続き彼の夜の夢を通じて描かれている。第31章でピップは次のような惨めな夢を見ている。

Miserably I went to bed after all, and miserably thought of Estella, and miserably dreamed that my expectations were all cancelled, and that I had to give my hand in marriage to Herbert's Clara, or play Hamlet to Miss Havisham's Ghost, before twenty thousand people, without knowing twenty words of it. (197-98)

短い文章の中に「惨めに」(miserably) という単語が3度も登場し、彼の感じる惨めさが強調されている。この事実自体は、彼が直前にウォブスル氏の惨め

² 筆者とは異なる視点からピップの夢に着目したクレア・スラグター (Claire Slagter) は、豚という泥にまみれる動物の次に人間が配置されることで、ピップが同胞である人間を見下し、この時点ですでにスノブになりつつある事を示していると論じている (181-82)。

³ 佐々木徹氏はピップがミス・ハヴィンシャムに請われてパンプルチュークの馬車のものまねをする場面を取り上げ、本作に見られる英国ジェントルマンに関する言及の中でもとりわけディケンズの筆が冴える場面と高い評価を与えている (401-2)。

な素人芝居を見たことに起因していると考えられるが（そしてそれがハムレットを演じなければならない、という次の記述に繋がっているのだが）、一方で、夢の中でクレアラと結婚する羽目になる、という箇所については、この前の章に描かれる出来事と併せて注意が必要だろう。前章にあたる第30章で、ピップはハーバートに対し、自分がエステラを熱烈に愛しているという事実を告白する。それを聞いたハーバートは、「今から自分は嫌な奴になる」と宣言した上で、エステラのごとは彼がもらう予定の財産の中に入っていないのではないか、と述べて、ピップがエステラとは結婚できない可能性を指摘し、惨めになるだけだから彼女のことを諦めるようにと繰り返し諭す。それに対してピップは、「でもどうにもならないんだ」（“but I can't help it”; 191）と言うが、注意したいのはその時の彼の態度である。ハーバートの主張に耳を傾ける際、ピップは顔を背け（“I turned my head aside”; 191）、さらには両者の間にしばし沈黙が流れたと語る（“There was silence between us for a little while”; 191）。この場面でピップがハーバートの言葉に耳の痛い思いをしたのは間違いないだろう。実際、彼は「どうにもならないんだ」と返事をする際も、「まだ顔を背けたまま」（“with my head still turned away”; 191）述べたと述懐しており、ハーバートの言葉から受けた衝撃が小さなものでなかったことが窺える。そのような経験をした後で、ハーバートの恋人と結婚する（つまりハーバートの恋人を奪う）夢を見る、というのは、自身の将来に対する不安だけでなく、そのような冷や水を浴びせかけたハーバートに対する意趣返しの意味合いが込められていると言えるだろう。このようにピップは紳士となってからも、自らの不安を反映した悪夢に苛まれているのである。

こうしてたびたび悪夢を経験した末に、マグウィッチという実体を伴って、本当の悪夢がピップの前に姿を見せる。第39章で、ピップに莫大な財産を与えてくれたのが、彼がそうだと期待していたミス・ハヴィシャムではなく、元四人の男マグウィッチだったという事実が判明する。それに対してピップは、

「ミス・ハヴィシャムの私に対する思惑など、すべて夢だったのだ。エステラは私と結婚することになっていなかったのだ」(“Miss Havisham’s intentions towards me, all a mere dream; Estella not designed for me”; 243) と、「夢」という言葉を用いて絶望を露わにする。この後で描かれる彼の夢はとりわけ興味深い。彼は散々眠れぬ夜を過ごした末に、「一種の夢か、あるいは半醒半睡の状態で、自分が暖炉のそばに座り、〈彼〉が朝食に降りてくるのを待っていた」(“in a sort of dream or sleep-waking, I found myself sitting by the fire again, waiting for—Him—to come to breakfast”; 246-47) と述懐する。この場面で描かれる半醒半睡 (sleep-waking) とは、眠っているとも目覚めているともつかない中間の意識の状態を指し、ディケンズが強い興味を持っていた眠りの状態の1つである。⁴ ピップ自身が「一種の夢」と表現しているように、これはいわば白昼夢を見ている状態でもあるが、その描写が、彼がここまで苦しんできた悪夢と大きく異なっている点に注意する必要がある。これまでピップは、夜の眠りの中で自身の罪悪感や不安を反映した悪夢に苦しんでいた。しかしこの場面で彼の悪夢は夜の眠りを飛び出して、昼間の目覚めの中にも浸食しているのだ。別の言い方をすれば、これまで眠りの中の悪夢が彼を苦しめていたのに対し、ここでは彼の現実世界こそが悪夢となっているのである。これは彼が人生の大きな転換点にいることを意味している。この後、彼は立て続けに眠り、そして悪夢を見るが、「目が覚めると、夜の間にならなくなった恐怖が蘇ってきた」(“I woke, too, to recover the fear which I had lost in the night”; 258) と語られ、悪夢が眠っているときにとどまらず、目覚めているときの世界を浸食している事がより明確に示されるのである。

昼夜を問わず悪夢に苦しめられるようになったピップであるが、しかし逆に

⁴ ディケンズは主要長編小説 15 作品のうち、この場面を含めて 2 度、この表現を用いている。もう一例は『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*) に登場する女中アフェリー・フリントウィンチへの言及の中で見られる。アフェリーの半醒半睡も含め、ディケンズの半醒半睡への関心については、拙論 “Dickens and ‘Sleep-waking’” を参照のこと。

その悪夢のような現実と懸命に折り合いをつけようとする。そして悪夢の中心とも言うべきマグウィッチに対する態度を徐々に変えていったことが端的に示しているように、彼は変わってゆく。彼の変化は彼の夢の描写に現れている。まず、上記の場面以降、彼の悪夢が描かれる機会が〈ほぼ〉なくなっている。マグウィッチの訪問以降も、彼が眠りに落ちる場面は頻繁に描かれるが、そこに悪夢の描写が伴うことは一度の例外を除いてないのだ。これまで考察してきたように、ピップは度々悪夢に悩まされている。そのことを考えれば、頻度という観点でそれ以前と大きく違っているのは明らかであろう。

先ほど、ピップの悪夢が描かれることが〈ほぼ〉なくなる、と表現したように、一度だけ彼の悪夢が描かれることがある。その唯一の例外が、第57章に描かれる夢である。ピップはマグウィッチを看取った後、熱病に冒され、次のようにうなされる様子が描かれる。

That I had a fever and was avoided, that I suffered greatly, that I often lost my reason, that the time seemed interminable, that I confounded impossible existences with my own identity; that I was a brick in the house-wall, and yet entreating to be released from the giddy place where the builders had set me; that I was a steel beam of a vast engine, clashing and whirling over a gulf, and yet that I implored in my own person to have the engine stopped, and my part in it hammered off; that I passed through these phases of disease, I know of my own remembrance, and did in some sort know at the time. (343)

ここで彼は自分が壁のレンガの1つになり、次いで巨大なエンジンの梁の1つになったという悪夢を見ている。自分自身をそのいずれからも取り外してくれ、と願っているように、この夢が彼の解放願望を反映していることは間違い

がない。そして、その願いを叶えてくれるのはジョーである。うなされる中で、ピップは1つの顔だけが変わらないこと、それが自分を看病してくれるジョーだという事に気づき、目覚める。こうしてジョーの献身によって、ピップは死の危険のみならず悪夢からも解放されるのである。

ピップが悪夢から解き放たれたという事実は、彼の眠っているときの夢に関する作品中最後の言及から読み取ることができる。回復したピップはジョーとビディの元を訪れる際に青猪亭に泊まるが、以前とは異なりひどく粗末な部屋をあてがわれる。これは彼が莫大な財産の受贈者から、その財産を失った貧乏人へと立場を変えた事を反映しており、ピップ自身、宿屋の主人の冷淡な態度から、その変化を強く実感させられている。しかしそのような状況で、彼は「私はその部屋で、青猪亭の一番良い部屋と同じくらいぐっすりと眠れたし、また夢の質も最上級の部屋で眠るのと同じだった」(“I had as sound a sleep in that lodging as in the most superior accommodation the Boar could have given me, and the quality of my dreams was about the same as in the best bedroom”; 350) と述懐しているように、心地よい眠りを得ているのだ。ここで思い出したいのは、第18章で財産を贈与される見込みを得たピップが、もはや長年暮らした自分の部屋のベッドで良い眠りを得られなくなった、と語っている場面である。この青猪亭におけるピップの心地よい眠りの描写は、第18章の描写と好対照をなすように描かれており、ピップがもはや自身の立場の表面的変化に左右されない人間になったという彼の成長を表すとともに、彼が悪夢から解放されたことを示唆しているのである。

このように、ピップは作品序盤から眠っているときの悪夢に悩まされている。悪夢のきっかけは、囚人を助けたことに伴う罪悪感と罪の発覚への恐れであり、更には後日その囚人によってもたらされる紳士になってエステラと結婚するという夢の実現に関する不安である。そして彼の悪夢は徐々にその性質を変えつつ彼を苦しめていき、最終的には現実世界にまで浸食する。しかし彼は

ジョーの助力を得て、最終的にその悪夢から解放されるのである。

3. 「フィクションとしての夢」と「本物の夢」

前章で考察したように、ピップは囚人を助けて以降、度々悪夢に悩まされる。それは紳士になるという将来の夢が現実になることで悪化し、その夢が崩壊することでさらに酷いものとなる。しかし最終的に彼はその状況を乗り越え、夢から解き放たれる。それでは、これらのピップが眠っているときに経験する夢は、何を意図して描かれたものであろうか。ここで注目したいのは、一口に悪夢と言っても、その描写が決して均一のものではない、という点である。特にディケンズが描いた悪夢のうち、最後にピップが経験する悪夢と、それ以前の悪夢とでは、その描写が大きく異なっている。例えば物語前半の夢の描写では、彼が目覚めていたときに見聞きした監獄船やヤスリが現れ、彼を苦しめていたのに対し、最後の悪夢では自分がレンガやエンジンの一部になるなど、目覚めていたときの経験とは一見脈絡のない描写がなされている。端的に言えば、この違いは、ピップがかつて経験していた悪夢があくまで「フィクションとしての夢」であるのに対し、彼が最後に経験する夢は、「人間が経験する本物の夢」（とディケンズが信じたもの）であることを表している。本章ではピップが経験する最後の夢の描写の意味とその重要性を考察し、ディケンズが本作に描いた夢の描写の意味についてさらに追求したい。

分析を進める前に、まずディケンズと眠り、あるいは夢との関係についてまとめておきたい。というのも、ピップの最後の夢の描写は、当時のディケンズが抱いていた独自の夢理論と密接な関係があり、その意味を考察する上で、ディケンズと眠りや夢の関係を理解しておくことが不可欠だからである。眠りや夢は古来より多くの文学者を魅了してきたが、19世紀ヴィクトリア朝にお

いて、眠りや夢にもっとも強い関心を寄せた作家はディケンズであった。⁵彼は多数の専門書を読むとともに、自身や周りの人間の経験を元に、独自とも言える眠りと夢の理論を構築していた。彼の眠りと夢に対する関心の強さがもっともよく示されているのが、長編小説第1作目の『ピクウィック・ペーパーズ』(*The Pickwick Papers*) に登場する太った少年ジョーの描写である。発表当時は滑稽なだけとされていた頻繁に眠る少年の描写が、後に睡眠時無呼吸症候群の克明な描写であるとの医学研究がなされたという事実は、ディケンズが眠りや夢に強い関心を払っていたことを如実に物語っている。⁶

これはあくまで後の時代において、ディケンズの眠りに関する先見性が示された事例であるが、一方で同時代人とのやりとりの中で、彼の眠りと夢への関心の高さと知識の豊富さが示された事例がある。それが、1851年のトマス・ストーン医師 (Dr. Thomas Stone) への手紙である。当時、ディケンズが編集長を務めていた雑誌『ハウスホールド・ワーズ』(*Household Words*) に、ストーン医師という人物から「夢」(“Dreams”) と題するエッセイが送られてきた。このエッセイを読んだディケンズは同年2月2日付けでストーン医師に対してエッセイの書き直しを要求する手紙を書いたのである。その手紙は原稿に数々の修正を求めるもので、冒頭からディケンズのワンマン編集長ぶりが遺憾なく発揮されている。

⁵ 眠りや夢に強い関心を寄せたという事それ自体が、当時のリアリズム小説家の中でディケンズが特殊な存在であったことを示している。同時代の作家ジョージ・エリオット (George Eliot) は、作品の中に夢の描写を導入してはどうかと編集者から提案された際に、「夢は小説の中ではよく重要な役割を果たしますが、私が思うに、現実ではほとんどそういうことはありませんわ」(“Dreams usually play an important part in fiction, but rarely, I think, in real life”; Eliot 309) と述べ、夢を作品に用いる事を否定的に捉えている。キャサリン・バーナード (Catherine A. Bernard) は、これが当時のリアリズム小説家の典型的な姿勢であり、彼らは夢をゴシック小説にこそふさわしい題材と思っていたと考察している (206)。

⁶ 1956年、C・シドニー・バーウェル (C. Sidney Burwell) らは作中のジョーの描写を詳細に分析し、肥満と眠気、赤血球の増加と大食といった事実を結びつけ、この少年が、彼らが「ピクウィック症候群」(the Pickwickian Syndrome) と命名したところの睡眠障害を患っていることを明らかにした (811-18)。

I take the liberty of offering a few remarks to you in reference to your paper on Dreams. If I venture to say that I think it may be made a little more original, and a little less recapitulative of the usual stories in the books, it is because I have read something on the subject, and have long observed it with the greatest attention and interest. (*Letters* 6: 276)

いかに雑誌の編集長であるとはいえ、医学の素人が医師を本職とする人物に対して、「もう少しオリジナルな内容にしてもらいたい」などという指示を与えるというのは、常識外れと言っても良い行為であろう。⁷一方で、引用の後半に見られる「自分自身、夢について読んできており、また長年に渡り、この上ないほどの注意と関心を持って夢を観察してきた」という彼の言葉と併せて考えると、彼がこのジャンルに関する自分の知識と経験に対して、いかに強い自信を持っていたかを表すものとも言えるだろう。

この手紙の中で、彼はエッセイの改良点を無数に挙げていくのだが、中でも真っ先にあげている点が見逃せない。なぜならそれはビップの夢の描写と関係しているように思われるためである。彼は次のように述べている。

In the first place I would suggest that the influence of the day's occurrences, and of recent events, is by no means so great (generally speaking) as is usually supposed. I rather think there is a kind of conventional philosophy and belief, on this head. My own dreams are usually of twenty years ago. I often blend my present position with

⁷『オリヴァー・ツイスト』(*Oliver Twist*)の第34章に見られる夢の特殊性を考察したデイヴィッド・マクアリスター(David McAllister)は、ディケンズと夢に関連するエピソードとしてこの手紙を取り上げ、ディケンズのこの行為を「驚くべきもの」(surprising)だと述べている(2)。

them. (*Letters* 6: 276)

ここでディケンズが何よりもまず強調しているのは、昼間に起こった出来事、あるいは直近に起こった出来事は、一般的に思われているほど夜に見る夢には影響しない、という点である。悪夢を見た場合、人はとかくその原因を手近な出来事に求めがちである。例えば悪い夢を見たのは、その日の昼間に悪い出来事があったからだと考える、という具合である。しかしディケンズはこれを否定し、そういうケースは稀で、むしろ大昔の出来事が現在の立場、状況と夢の中で混ざり合ったりすると言う。「一般に思われているほどではない」という言葉が示しているように、これは当時の通説ではなく、ディケンズ独自の理論と言って良い。実際、この短い引用の中でも、「私はむしろこう思う」という表現や、「私の夢は…」という記述が複数見られるなど、自分自身の事例に基づく説が前面に出されているのが目につく。このような彼の姿勢からは、ディケンズの自分自身の夢に関する経験と、それに基づく知識への強すぎると言っても良い自信が読み取れる。そしてこのことは、彼の夢理論が、同時代の専門家たちが唱えるものと異なり、独自性が強いということをも示している。⁸

とりわけ重要なことは、上述のように主張した上で、その人物が目覚めているときに抱えている問題などが夢に現れるという特別なケースがあり得るとい

⁸ 例えばディケンズに最も強い影響を与えたと考えられている19世紀の眠りの権威ロバート・マクニーシュ (Robert Macnish) も、その著書『眠りの哲学』(*The Philosophy of Sleep*)の中で、「何であれ昼間に我々の注意を大きく引いたものは夢に変わりがちだ」(“Whatever has much interested us during the day, is apt to resolve itself into a dream”; 52)と述べて、昼間の出来事が夜の夢に影響する可能性が高いことに言及している。また、ストーン医師自身、ディケンズからこのような指摘を受けたものの、最終的に掲載された自身のエッセイの中でも、昼間の出来事が多くの人の夢に影響を与えることは「疑いの余地がない」(“There can be no doubt”; 568)との主張を行っており、この説に対する強い自信が窺える(ただし、さすがに編集長の指示を無視するわけにはいかなかったようで、続けて「ただし、これは常に当てはまるわけではない」と付記し、20年前の夢を見ることもあるという、ディケンズらしき人物の例を挙げている)。

うことと、その発生条件について言及していることである。

I should say the chances were a thousand to one against anybody's dreaming of the subject closely occupying the waking mind—except—and this I wish particularly to suggest to you—in a sort of allegorical manner. For example. If I have been perplexed during the day, in bringing out the incidents of a story as I wish, I find that I dream at night—never by any chance, of the story itself—but perhaps of trying to shut a door that *will* fly open—or to screw something tight that *will* be loose . . . (*Letters* 6: 276)

「特にあなたに提案したい」という言葉が示しているように、ここで述べている説はディケンズが特に強く信じ、かつ重要視していた夢に関する独自の理論と考えることができる。彼は、人々が直近の出来事（そのとき、その人物の頭を悩ませている出来事）を夢に見る場合、それは「一種の寓話的な形で現れる」ケースがほとんど、という。では、彼の言うところの「一種の寓話的な形で現れる」夢とはどういうものか。続けて彼はその例として、締め切りに追われている際に、閉められないドアを閉めようとする夢などがそれにあたる、と説明している。つまり、「一種の寓話的な形で現れる」夢とは、昼間にその人の頭を悩ませている（あるいは経験している）出来事と直接的にはつながりが見出せないが、象徴的な形でそれを反映していると考えられるような夢のことだと理解できる。これはまさにピップが物語の最終盤で経験する、壁のレンガの1つ、あるいは巨大なエンジンの一部となり、そこからの解放を願う夢を指すのではないだろうか。⁹

⁹ 1970年代後半にアラン・ホブソン（Alan Hobson）とロバート・マッカーリー（Robert McCarley）が提唱した「活性化合成仮説」（Activation-Synthesis Hypothesis）では、

もう一度、あの最後の悪夢に至る状況と、その意味について考えてみよう。ピップは紳士になる夢を抱き、ロンドンへやってきた。そしてそれに伴い、小さい頃から自分を助けてくれたジョーやビディに対して冷たい態度を取るようになった。しかし紳士になる夢、そうしてエステラと結婚するという夢ははかなくも破れ、借金取りに追われる状況となった（熱病で倒れる直前、彼は借金取りの訪問を受けている）。結局、彼はまやかしの紳士に過ぎなかったのであり、紳士になるという夢に浮かされていただけなのである。換言すれば、自分が本来そうではない紳士という存在になることを夢見たために、そして一度そうなりかかったために、すべてがおかしくなった事を痛感したのである。そういった、本来自分がなれないはずの存在になろうと夢見たことが、人間がなれないはずのない「壁のレンガの1つ」や「巨大なエンジンの梁の1つ」になるという夢の描写につながり、そういった状況から脱出したいという願いが、自分を「取り外して欲しい」と願う描写につながっているのである。

実は同様の夢の描写が、ストーン医師への手紙のおよそ1年後に執筆された『荒涼館』(*Bleak House*)の中にも見いだすことができる。第31章で病に倒れた主人公のエスタは、召使いのチャーリーの看護を受けて必死に病氣と戦うが、その際に悪夢に苦しむ様子が描かれている。

Dare I hint at that worse time when, strung together somewhere in

夢が奇妙であるのは、それがランダムな皮質活動の産物であるからとしている。夢を見ている際に稼働している前脳部は記憶を司る部位でもあるが、レム睡眠中にそこがランダムに作動するため、夢で見るものは前後のつながりのおかしい、奇妙なものになるという主張である。しかしこの説を発展させたロバート・スティックゴールド (Robert Stickgold) は、そのランダム性にもパターンがあると夢の中身を分析し、人は夢の中で別の生き物になることはあるが、無生物になることはなく、またその逆もないと考察している (Moorcroft 214-16)。一方、物体になる夢を見るケースは、カナダで3.5%、ドイツで2.5%、中国で17.5%、ヨルダンで2.1%見られるという別の研究も存在する (Schredl, 182)。このように現代の夢研究の観点から見て、レンガのような物体になるという夢は、確率は低いが起こりえると考えられており、その点でディケンズの夢の描写は現実に即していると言える。

great black space, there was a flaming necklace, or ring, or starry circle of some kind, of which *I* was one of the beads! And when my only prayer was to be taken off from the rest, and when it was such inexplicable agony and misery to be a part of the dreadful thing? (444)

このように彼女は自分が燃える巨大なビーズのネックレスの粒になっている夢を見て、そこから解き放たれることを強く願っている。¹⁰ 自分自身が巨大な何かの一部になり、そこからの解放を願う、という点において、これはピップが第57章で経験する悪夢と酷似していると言える。ウィンタース (Warrington Winters) も指摘しているように、これら2つの夢の場面は、前述の手紙の中でディケンズが経験した、人の直近の経験が寓話的な夢となって現れる、その典型例なのである (995-96)。別の言い方をすれば、これらの夢の描写こそが、ディケンズの考える「リアルな夢の描写」と言うことができるだろう。

これらの夢と比較すると、ピップがそれ以前に経験していた夢は大きく趣が異なっている。例えば幼年期のピップが見た夢では、監獄船の話をした直後に監獄船が、ジョーのヤスリと2ポンドのお札を見た直後にそれらのものが、各々夢の中に現れている。また同様に、ロンドンに出る前夜に「ロンドンにたどり着けない」という夢を見たり、あるいはウォブスル氏の芝居を見た直後に

¹⁰ エスタのこの夢の解釈について、批評家たちの意見は割れている。西條隆雄氏は、ビーズのネックレスはデッドロック家の欺瞞と無責任さを反映し、エスタはそれからの解放を願っていると解釈している (217-18)。一方スーザン・シャットー (Susan Shatto) はこの描写はドクインシー (Thomas De Quincey) の『アヘン吸引者の告白』 (*Confessions of an English Opium-Eater*) への言及だと指摘している (220-21)。またジョン・ゴードン (John Gordon) は、このネックレスは彼が本作の中心に位置すると考えるメデュースのテーマ、すなわち「最も触れたいものは最も恐ろしいものである」というテーマを反映したものだとして分析している (131, 133)。このようにネックレスの解釈を巡り、批評家の意見は一致を見ていない。筆者自身は、ネックレスそのものよりもむしろこの夢の描写に見られる「永遠性」「円環」のイメージこそが、作品の中心に位置する大法官裁判と結びつく重要なものと考えているが、この問題についてはさらなる研究が必要だろう。

『ハムレット』を演じる夢を見たり、ハーバートからエステラとの結婚を否定された後でハーバートの恋人と結婚する夢を見るなど、直前の出来事とその後に見る夢とが直接的な形でつながっていることが窺える。だが、ディケンズ自身がストーン医師への手紙の中で述べているように、これは「一般的に信じられている」夢のパターンではあっても、彼自身が信じていた夢の理論とは相容れないものである。その点で、これらの夢の描写はあくまでディケンズにとっての「フィクションとしての夢」と言えよう。「フィクションとしての夢」に苦しんでいたピップが、最後の最後に「本物の夢」を経験し、そこから目覚めて悪夢から解き放たれるという展開は、彼の最後の夢が彼の人生における転換点である事を示すだけでなく、彼が完全に夢から解き放たれたという事実を強調する役割があるのではないだろうか。

4. 「夢」からの解放

本稿では『大いなる遺産』を夢という観点から考察してきた。ピップの夢というと、とかく読者は「紳士になる夢」という比喩的な夢を想像するが、実際のピップは作中度々眠っているときに悪夢を経験している。彼が当初経験していた、眠っている際の悪夢は、基本的に彼が目覚めているときに経験した出来事を如実に反映したものである。これは、手紙から読み取れるディケンズ独自の夢理論という観点から見て、あくまでフィクションとしての夢、すなわち実際に人が経験することのないような悪夢と言えるものばかりであった。しかし、ピップは最後の最後にディケンズが考える本当の悪夢を経験し、そしてジョーの力を借りてそこから目覚める。このように夢の描き分けを用いる事で、ディケンズはピップが物語の最後には夢から完全に解き放たれていることを強調しているのである。

ピップが悪夢から完全に解き放たれていることを強調する、という描写は、同時にもう1つ重要な意味合いを帯びている。それは、ピップがもう1つの夢

からも解放されている事を示唆しているということだ。すなわち、目覚めているときに見る夢、紳士となってエステラと結婚するという夢からも解放されているということである。

これが重要なのは、本作のエンディングが抱える特殊な問題と関わるためである。広く知られていることではあるが、この『大いなる遺産』には2つの異なるエンディングが存在する。1つは後日ピップとエステラがロンドンの街角で再会するものの、2人の別れが完全に明示されるオリジナルエンディング、もう1つは、ピップが最後にサティス・ハウス跡地でエステラと再会し、両者の復縁の可能性が示唆される（ように思われる）現行エンディングである。これは、ディケンズが作品を書き上げた際、敬愛する同時代作家のブルワー・リットン (Bulwer Lytton) にオリジナルエンディングのゲラを見せたところ、リットンが「ピップを孤独な男のままにしておく結末」(“a close that should leave Pip a solitary man”: *Life* 3: 335) に対して難色を示したため、急遽書き換えたことに端を発している。そしてディケンズの死後、親友ジョン・フォースター (John Forster) が『ディケンズ伝』(*The Life of Charles Dickens*) の中でこのエピソードに言及するとともに、参考資料としてオリジナルエンディングを掲載したため、多くの批評家がディケンズの意図を巡って議論をおこなってきた。この2つのエンディングとその意味については、これまで様々な批評家が詳細に検討しているため、ここで改めて詳しく論じるつもりはない。ただ、これまでの批評の基本的な流れをまとめると、伝記を書いたフォースターを筆頭として、当初批評家の多くはオリジナルエンディングを高く評価したが、¹¹ 20世紀後半からは逆にその曖昧性から現行エンディングを評価する声

¹¹ フォースターはオリジナルエンディングについて、「オリジナルエンディングは物語の趣旨だけでなく物語の自然な進行とより調和しているように思われる」(“the first ending . . . seems to be more consistent with the drift, as well as natural working out, of the tale”; *Life* 3: 336) と高く評価し、それを理由として『ディケンズ伝』の中にオリジナルエンディングを挿入している。

が見られるようになった。またエンディングで描かれるエステラとの再会そのものを重視しない批評家も現れ、¹²結論のようなものは出ていないのが現状である。¹³ 現行エンディングの問題は、極論すればピップがエンディングの時点で、未だにエステラとの結婚を夢見ているのか否か、という点に集約される。このように、ピップがまだ夢を見ているかどうか、という疑問は大きな問題として扱われているのだが、一方で彼のもう1つの夢と関連付ける形で考察した批評はこれまで存在していない。本稿で考察したように、ピップは眠っているときに悪夢に悩まされる様が度々描かれた上、その悪夢のきっかけも、マグウィッチという、自身の紳士への夢と密接に関わる人物との出会いに端を発しており、2種類の夢は交錯するようにして描かれている。かつてディケンズは『リトル・ドリット』の中で、目覚めているときに見る夢と、眠っているときに見る夢という、性質の異なる2つの夢を巧みに交差させることで、登場人物が常に夢に囚われる様と、そしてその夢から解き放たれる様を強調して描いていた。¹⁴同様のことが本作にも言えるのではないだろうか。そして、ピップが最後の最後で、ディケンズが「リアルな夢」と信じる夢から目覚めるという描写によって、ピップが「完全に」夢から醒めたことを表現しようとしたのではないだろうか。

本稿の目的は、2つのエンディングのうちのいずれかに優劣をつける事ではない。それでも、ディケンズがおこなったピップの夢の描写は、エステラとの

¹² マーティン・マイゼル (Martin Meisel) は、第 59 章前半で描かれる、帰国したピップが自分と同じ名を与えられたジョーとビディの子と出会い、いわば良き名付け親としてその子と接する場面こそが作品の結末であるとし、エステラとの再会エピソードは「追記」(postscript) に過ぎないとしている (327)。

¹³ 比較的新しいところでは、村上幸太郎氏が2つのエンディングと作品に描かれるピップの成長の関係を詳細に検討した上で、現行エンディングは決して唐突なものではなく、自伝を書くという行為の持つ自己正当化の問題を浮き彫りにしていると論じている (68-9)。

¹⁴ 『リトル・ドリット』において、ディケンズが巧みに2種類の夢の描写を交錯させている、という点については、拙論“Dreams in *Little Dorrit*”を参照のこと。

別れを明示したオリジナルエンディングこそが本作には適している、ということを示唆しているように思えるのである。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP18K12335 の助成を受けたものである。

参考文献

- Bernard, Catherine A. “Dickens and Victorian Dream Theory.” *Victorian Science and Victorian Values: Literary Perspectives*. Edited by James Paradis and Thomas Postlewait. Rutgers UP, 1985, pp. 197-216.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. Edited by Andrew Sanders. J. M. Dent, 1994.
- . *Great Expectations*. Edited by Edgar Rosenberg. W. W. Norton, 1999.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Edited by Madeline House et al. Clarendon Press, 1965-2002. 12 vols. (Abbr. *Letters*)
- Eliot, George. *The George Eliot Letters*, vol. 2. Edited by Gordon S. Haight. Yale UP, 1954.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Chapman & Hall, 1874. 3 vols. (Abbr. *Life*)
- Gordon, John. *Sensations and Sublimations in Charles Dickens*. Macmillan, 2011.
- Macnish, Robert. *The Philosophy of Sleep*. D. Appleton, 1834.
- McAllister, David. “‘Subject to the Sceptre of Imagination’: Sleep, Dreams, and Unconsciousness in *Oliver Twist*.” *Dickens Studies Annual*, vol. 38, 2007, pp. 1-17.
- Meisel, Martin. “The Ending of *Great Expectations*.” *Essays in Criticism*, vol. 15, 1965, pp. 326-31.
- Moorcroft, William H. *Understanding Sleep and Dreaming*. Springer, 2013.
- Shatto, Susan. *The Companion to Bleak House*. Unwin, 1988.
- Shaw, George Barnard. “Introduction.” *Great Expectations*. Hamish Hamilton, 1947, pp. v-xx.

- Schredl, Michael. "Typical Dream Themes." *Dreams: Understanding Biology, Psychology, and Culture*, vol. 1. Edited by Robert J. Hoss et al., Greenwood, 2019, pp. 180-88.
- Slagter, Claire. "Pip's Dreams in *Great Expectations*." *The Dickensian*, vol. 83, 1987, pp. 180-83.
- Stone, Thomas. "Dreams." *Household Words*, vol. 2, 1851, pp. 566-72. *Dickens Journals Online* <<https://www.djo.org.uk/household-words/volume-ii.html>>
- Watanabe, Tomoya. "Dickens and 'Sleep-waking'." *Dickens in Japan: Bicentenary Essays*. Edited by Eiichi Hara et al., Osaka-kyoikutosho, 2013, pp. 159-73.
- . "Dreams in *Little Dorrit*." *Albion*, vol. 60, 2014, pp. 1-15.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Viking Press, 1970.
- Winters, Warrington. "Dickens and the Psychology of Dreams." *PMLA*, vol. 63, no. 3, 1948, pp. 984-1006.
- 西條隆雄 『ディケンズの文学—小説と社会』 英宝社, 1998 年.
- 佐々木徹 「訳者あとがき」『大いなる遺産』下巻, 河出書房, 2011 年, pp. 389-411.
- 村上幸太郎 「結末から読み直す『大いなる遺産』」『Zephyr』第 23 号, 2010 年, pp. 52-71.